

(2) 令和6年度に実施した科目の概要について

・数学 B

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の双方向授業。令和4年度から3年間実施。

・数学 C

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の双方向授業。令和6年度に実施。

・マーケティング

小国高校のある小国町は県内屈指の温泉所でもあり、生徒も観光・サービス業を身近に感じており、経営に興味・関心を持つ生徒のニーズに応じる形で実施。小国高校には商業の専門教師がいないため、免許外教科担任制度の解消という側面での選定でもあった。令和4年度から3年間実施。

・マーケティング

球磨中央高校のSTによる専門的な知見から生徒の学びをさらに深めることが期待できる科目。また、受信校の立会者が専門（商業）であったことから、教員の教科専門性及び資質・能力の向上を期待して開講。令和6年度に実施。

・発展英語

難関大学進学志望者に向けた、STによる発展系の科目。受信側の生徒のニーズに応じるため、高い専門性を持つSTに授業を依頼した。本県のネットワーク構成校以外の学校から、受信側にのみ生徒がいる状態で配信している。令和5年度から2年間実施。

○各校における遠隔授業の様子

※記録上、同一科目の説明が配信校、受信校いずれか一方にまとめてある場合がある。

【熊本県立第一高校】配信（数学 B、数学 C）

現在、自校で行っている「遠隔授業」について

配信校：熊本県立第一高等学校
3 学年 2 組 32 名

講師：西嶋一

受信校：熊本県立小国高等学校
3 学年 5 名



遠隔授業実施科目：数学1A2BC

	月火	水木金
テキスト	キートレーニング 記述演習	重要問題演習 共通テスト演習
授業	予習あり 生徒が板書・解説を行う (そのあと教師が補足説明)	前半問題を解く 後半解説 (chromebookで解答を入力)

現在、自校で行っている「遠隔授業」について

双方向による学び

昨年度から引き続き、配信校、受信校の両生徒による問題解説を行い、双方向による学びが来ている。



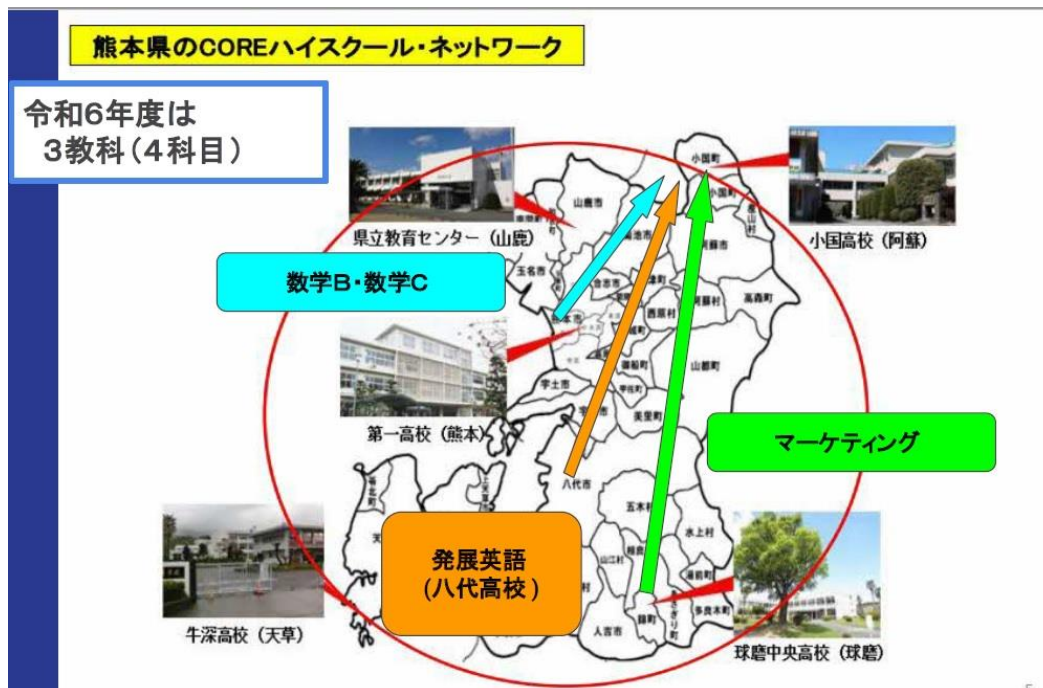
第一高校の生徒による解説発表



小国高校の生徒による解説発表

第一高校から小国高校へ配信される数学 B 及び数学 C の 2 科目については、配信側の 32 名と受信側の 5 名の生徒が同じ時間にオンタイムで行う合同型授業である。メインカメラの他にサブカメラを用いることで、2 校の生徒がまるで同じ教室にいるかのような距離感で授業を行うことが可能となる。人数の多い配信側主体となりがちな合同型授業であるが、授業担当者は、同時双方型による深い学びを重視し、小国高校の生徒が自分の解答を解説する活動なども授業に取り入れた。多様な生徒との協働的な学びにより、数学的思考力を深めることが期待される。また、生徒の問題に対するアプローチを生徒の手元をアップにして見取るなど丁寧な指導を心掛けた。

【熊本県立小国高校】受信（数学 B、数学 C、マーケティング、発展英語）



小国高校は、2つの高校と1人のSTから4つの科目を受信した。遠隔授業を受講する小国高校の生徒は、国公立大学や難関大学、海外大学への進学を志望するなど、基本的に基礎学力や学習に対する意欲が高い。熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業における遠隔授業の実施は、小規模校における生徒の多様なニーズに応じ、彼らの進路実現を図ることが目的の一つであり、自分の進路を実現させる過程で、他の生徒と切磋琢磨できる環境をこの創り出したことは大きな成果であると考えている。

○CORE ハイスクール・ネットワーク事業をとおしての小国高校の感じる成果について

- ・小国高校だけでは感じることができない大学進学に向けた意識・学習意欲の向上
- ・難関大学に向けた受験対策等のノウハウの共有
- ・職員間交流による指導方法の共有及び指導力向上
- ・生徒の興味・関心や進路志望に応じた教科・科目の選択肢の拡幅
- ・商業科目選択による、探究活動や進路との関連付け及び連携、資格取得

○遠隔授業を受講した生徒の感想

- ・地方の高校では、なかなか刺激を受ける場面がなく、第一高校の皆さんと一緒に授業を受けることができ、モチベーションを高められるような環境

- ・目指す場所は違ってもみんな同じ受験生であり、一緒に頑張れる仲間が増えたことがとても嬉しかったです。最初はとても緊張していましたが、貴重な体験ができ、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。
- ・実業高校で行われている実践的な授業を受けることができて充実している。マーケティングの実態を学んだことで、昨年度の探究活動の取組を振り返ってみると、マーケティングの重要性を感じた。
- ・他校の生徒と、オンラインでのグループワークを通して、一緒にアンケートを作成したことは貴重な経験となった。商業を専門的に学んでいる生徒の専門性の高さを感じて刺激になった。
- ・リーディング、ライティング、リスニングの毎時間の課題をとおして、受験だけにとどまらない英語力の向上を実感できている。

＜授業の進み方＞

(1) タブレットを利用した思考の共有…スプレッドシートを利用して、他者(他校生)との考え方を共有する。

問題①	2つのイラストはどのような状況だと思うか？ 入力条件：状況+理由+解決策
	例（この2つのイラストは・・・状況であると思う。なぜならば、○○○だから。・・・状況ではないならここに記入することもあるが、必ずしもここに記入する必要がある。）
年1生	この2つのイラストは、自然環境に関する状況であると思う。なぜならば、自然環境が自然環境でなくなってしまうから。自然環境がなくなってしまうから自然環境を元に戻す必要がある。自然環境がなくなってしまうから自然環境を元に戻す必要がある。
年2生	自然環境がなくなっている状況だと思う。なぜならば、自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。
年3生	この2つのイラストは、自然環境に関する状況であると思う。なぜならば、自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。
年4生	この2つのイラストは、自然環境に関する状況であると思う。なぜならば、自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。
年5生	自然環境がなくなっている状況。なぜならば自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。
年6生	この2つのイラストは、自然環境に関する状況であると思う。なぜならば、自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。
年7生	この2つのイラストは、自然環境に関する状況であると思う。なぜならば、自然環境がなくなっているから。自然環境がなくなっているから自然環境を元に戻す必要がある。

【熊本県立球磨中央高校】 配信（マーケティング）

現在、自校で行っている「遠隔授業」について



現在、自校で行っている「遠隔授業」について

マーケティングの授業



生徒の中には、将来、家業を継いだり、経営者を目指したりする生徒も存在！



カタログギフト作成&販売において学習したマーケティングの知識をもっと深めたい！



企業や地域を活性化するために、何が出来るかを学びたい！

マーケティングは、地域の特性を生かして、協働で学ぶことができる！

現在、自校で行っている「遠隔授業」について

マーケティングの授業②

グループワークを多く実施！ 球磨中央高校生4名+小国または牛深1名の班を作り各班でMEETを立ち上げ、招待して課題に取り組む！



人吉球磨にいながら、小国高校や牛深高校の生徒をより身近に感じることができます！
「せっかくのCOREだから一緒に学ぼう！」



現在、自校で行っている「遠隔授業」について

マーケティングの授業③

各班で市場調査のアンケートを考え、両校の全生徒・全職員に回答してもらいました！



学んだ知識は、**即実践！**
市場調査の内容を**実務として体験！**

(3) 成果発表会（公開授業）について

今年度新たに第一高校と球磨中央高校において取り組んでいる小規模校の学びの充実を目的とした教科・科目充実型の遠隔授業について、県内全域に遠隔授業の普及・促進を図り、もって高等学校教育の充実を図るため成果発表会（公開授業）を以下のように開催した。

実施校	熊本県立第一高等学校	熊本県立球磨中央高等学校
実施日時	令和6年12月17日（火）	令和7年1月23日（木）
該当科目	数学B (第3学年、配信先：小国高校)	マーケティング (第2学年、配信先：牛深高校)
参加者	・ 県立学校関係者7名 (参集5名、オンライン2名) ・ 東原義訓信州大学名誉教授 ・ 認定NPO法人カタリバ3名 ・ 県教育委員会関係者4名	・ 県立学校関係者12名 (参集5名、オンライン7名) ・ 県教育委員会関係者4名 ・ 高知県教育委員会関係者
内容	公開授業見学、事業内容説明、協議及び質疑応答	

【第一高校での成果発表会（公開授業）の様子】



生徒の解答する様子を観察しながら、授業担当者が見取りを行っていた。



配信校・受信校の生徒がコミュニケーションをとりながら授業が進んでいた。



参集とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催した。

公開授業後には本事業内容の説明、協議及び質疑応答の時間を設けた。授業担当者から本時のねらいや、遠隔授業を行ううえで気を付けていること等、遠隔授業を初めて参観された方にも分かりやすい説明をしていただいた。また、遠隔授業コーディネーターからは、普段の業務内容や他校との連絡調整等の具体的な内容について報告いただいた。

その後の協議の時間には活発な質疑応答が行われ、時間割についてや、授業を行う場所についての質問や、対面授業との違いによる評価方法に関する質問等多くの質問が参加者から相次いだ。東原義訓信州大学名誉教授からは双方向や合同授業など多様な遠隔授業のスタイルについて、生徒が持っている一人一台端末を活用することで、本県における遠隔授業の可能性は大きく広がることについてもお話しいただいた。時間を超過するほど活発な協議となり、参加者の満足度も高い様子から、成果発表会（公開授業）をとおした遠隔授業の普及・促進に一定の手ごたえを感じた。

【球磨中央高校での成果発表会（公開授業）の様子】



自分の意見をスプレッドシートに入力するだけでなく、互いに意見交換を行っていた。画面越しでも両校とも活発な意見交換につながっていた。



牛深高校側でも受信校側として成果発表会（公開授業）の様子を職員が複数名見学されていた。

公開授業後には第一高校で実施した成果発表会時と同様、本事業内容の説明、協議及び質疑応答の時間を設けた。授業担当者からは、生徒の授業中の理解の様子を定期的に確認しながら、授業展開を行っていることや、特に受信校側には意識して質問や発言の機会をとるようにしていることなど、遠隔授業を効果的に進めるための工夫について話していただいた。また、年度初めの日程調整など一番多くの時間を使うことなど、学校間連携型の遠隔授業による負担感についても言及された。まさにここが学校間連携型の課題の一つであり、この負担感を少なくするためにも配信センターの設置が本県の急務であることを再確認したところである。

その後の協議の時間には多くの質疑応答が行われた。Google Classroom を活用する例や見取りの工夫についてなど、遠隔授業だけでなく対面授業においても活用できるような指導上の工夫における共有を行うことができた。

今年度は12月と1月の2回の時期に成果発表会（公開授業）を実施したが、特にネットワーク構成校以外に遠隔授業に対する理解を深めるためには、今後も積極的な情報発信が必要であることを感じた。遠隔授業を効果的に行うための授業改善についても話題になり、教員の指導力向上にもつながったことは、とても有意義な機会になったのではないかと感じる。しかし、日程の設定については、12月が共通テストの直前でもあり、生徒及び学校側には大きな負担をかけることになったことは反省しなければならない。教員の指導力向上やこれからの新しい教育のあり方についても考えることができる実践的な取組として、生徒及び学校側の負担が少ない時期に一人でも多くの参加者を増やしていけるよう、次年度以降も継続して計画していきたい。

(4) 運営指導委員会について

当初は3回の開催を計画していた運営指導委員会であるが、日程の都合により1回のみで開催となった。各校が実践している遠隔授業及び探究的な学びについて、運営指導委員の方々から多くの専門的見地による指導・助言をいただき、事業の充実・改善により一層弾みをつけたところである。また、本年度初めて、実際に遠隔授業を受けている生徒の感想を生徒自身に発表してもらう時間を設けるなど、生徒主体の遠隔授業・探究的な学びに近づけることができるよう取り組んだ。今後も改善を図りながら本事業の発展につなげていきたい。

①遠隔授業を受講した生徒の感想発表

(配信側：球磨中央高校 受信側：牛深高校、小国高校)

○球磨中央高校生徒の感想発表

- ・遠隔授業を一緒に受けている小国高校の生徒は3年生なので、同じ課題に取り組んだりするときも考え方がしっかりしていて心強かった。他学年の先輩と同じ授業を受けて、関わることができ、とても良い経験になった。
- ・牛深高校と一緒に遠隔授業を行う中で、刺激を受けた発想がとても多く、教科書では学べない内容にとっても勉強になった。美味しいものや観光名所など、それぞれの地域について情報共有ができて楽しかった。

○牛深高校生徒の感想発表

- ・球磨中央高校の生徒さんと意見交換する中で、牛深高校の生徒同士では思いつかないような考えなどがいくつもあり、とても勉強になった。
- ・遠隔授業なので、音声が少し聞き取りにくい部分があったが、遠隔で別の地域の学校の生徒と授業を受けることができてとても楽しい。

○運営指導委員より

- ・感想を聞いて、普段出会わないところでの交流があるところが遠隔授業の利点であると感じた。他校の生徒から新しい発想を取り入れたことによって、自分が成長できたと思うことなどがあれば教えてほしい。
- (牛深) 今まで自分目線でしか商品を考えられなかったが、マーケティングの授業で球磨中央高校の生徒さんからたくさんの意見を聞くことで、自分が考えなかった新しい角度で商品を考えたりすることができるようになった。視野が広がった。
- (球磨中央) 小国高校の生徒さんは先輩なので、自分たちよりも考えがしっ

かりしていて、参考にさせてもらうことも多かった。牛深高校の生徒さんと話す中で、地域の魅力をマーケティングに応用するという柔軟な発想などが、大変勉強になった。

②遠隔授業についての現状報告

○第一高校より

- ・配信校、受信校の両生徒による問題解説を行うことで、双方向による学びができており、多様な生徒との協働的な学びをとおして、数学的思考力を深めることが期待される。
- ・日課を合わせることで、時間割等での制限や、受講人数 40 人を考えたクラス編成など、様々なことを考える必要がある。

○小国高校より

- ・一町一校の環境なので、遠隔授業をとおして大学進学という目標を持つ多くの同級生と同じ環境で授業を受けることがとても良い刺激になっている。
- ・マーケティングの授業で学んだことを生かして、探究的な学びの取組について、自ら振り返る機会になるなど、より深い学びを生徒自身が感じることができている。
- ・部活動の試合において「君、遠隔授業受けているよね？俺も一緒に授業受けてるよ。お互い頑張ろうね。」と互いに声をかける姿が見られた。遠隔授業内の交流が、地域を超えた人との結びつきにつながっている。
- ・難関大学に向けた受験指導等のノウハウの共有や、職員間交流による指導方法の共有など職員の指導力向上も実感している。
- ・配信校と受信校の日程調整の難しさや、生徒の理解に合わせたサポートを行う必要がある。

○球磨中央高校より

- ・マーケティングは地域の特性を生かして、協働で学ぶことができるため、他の地域の学校と遠隔授業でつながることは球磨中央高校の生徒にとっても学びが深まる。
- ・受信側に 7 割ほど質問を多く行い、対面授業と同じように差をなくすようにしている。

○牛深高校より

- ・探究シートを活用し、遠隔授業の学びをとおして、自分の考えがどのように変化したのかを生徒に可視化させることで、生徒自身が学びの深化を実感し

ている。

- ・スプレッドシートを利用して、他校の生徒と考え方や思考の共有を図り、対話的な学びが実践できている。

○運営指導委員より

- ・これまでの実践に基づき、各校がさらに学習の工夫をされており、それが成果としてでている。時間割が決まっているので学びのリズムができています。
- ・個別の生徒の考え方についてスプレッドシートなど、様々な交流手段を駆使しながら生徒たちは意見交流をとおして学びを深めている。
- ・これまでの取組を改善して、より良い遠隔授業の実践ができていると感じた。授業中のタブレットの活用について何か実践されていたら教えてほしい。

→（球磨中央）Google Meet を活用し班活動に取り組んでいる。スライドの共同編集やスプレッドシートに意見を集約し、友だちの意見や感想を自由に見ながら理解を深めるなどの学習に活用している。

→（小国）オンライングループワークとスライドの共有が生徒たちは教育効果が高まっていると感じる。マーケティングの授業をとおして、自分たちの探究的な学びがどのように授業内容と結びついているか実感している。

- ・遠隔授業において、良い学びができているが、配信側について負担があるのが実情である。配信側のメリットについて何かあるか。

→（球磨中央）小国高校の生徒はビジネス基礎など商業の基礎科目を受講していないので、そのような生徒たちにどのようにマーケティングという発展的な内容を学ばせるかについて、授業担当者として教材研究を丁寧に行った。その結果、配信側の球磨中央高校の生徒達にも分かりやすい授業を展開することができ、理解度の向上につながった。

→（運営指導委員）先生方のスキルアップ、キャリアの向上につながったというのは新しい視点で素晴らしい。

→（第一）他校の生徒と交流することによるメリット以上に、配信側の負担が大きいのが事実。配信側のメリットとして感じることができるよう、やり方や教科について考えていく必要がある。

③探究的な学びについての現状報告

○第一高校より

- ・花畑広場の利活用について熊本市と一緒に取組を進めている。熊本市との連携のため、他の自治体が入ることについて配慮するなど、今後は市の担当者とも連携しながら進めていく必要があると感じる。

○小国高校より

- ・総合的な探究の時間の学力向上研究指定事業により、様々な活動に取り組んでいる。CORE 事業のネットワーク構成校との連携により生徒の可能性を広げる一つになると考えている。
- ・評価のあり方についても検討を行っている。
- ・球磨中央高校とのコラボとして、13名の生徒が球磨中央高校の球磨中央百貨店で OGUNI-GIFT、KIYORA-GIFT、湯気の森（入浴剤）の販売を行った。接客や陳列販売の仕方など、球磨中央高校の生徒が販売する様子を参考に、販促活動に活かしたことは、生徒にとって大きな学びにつながった。
- ・第一高校とのコラボとして、花畑広場プロジェクトの中で OGUNI-GO プロジェクトのブース展示ができないかオンラインで打ち合わせを何度も行い、実際にイベントに参加した。

○球磨中央高校より

- ・小国高校のギフトカタログの販売を球磨中央百貨店で行った。
- ・マーケティングの遠隔授業で商品開発を学び、実際に商品の販売まで結びつけることができれば、実学での体験も加わり、学びが深まるのではないか。

○牛深高校より

- ・ネットワーク構成校との連携はなかなかできなかったが、地方自治体や大学との連携を行っている。
- ・単年度で終わる取組ではなく、先輩達から活動を引き継いでブラッシュアップさせていくような探究的な学びができればと考えている。

○運営指導委員より

- ・最初から最後まで一緒にやるというのではなく、協力できる視点を探しながら活動を行っていると感じた。足並みを揃えるのではなく、他校のやり方や取組について、自校のやり方につなげていければ良いと感じる。
- ・地域での交流を、ぜひ他地域との交流に発展させていくことができれば、CORE 事業の構成校のつながりもより深いものになるのではないか。
- ・探究の時間で切り開いたコンテンツを教材としてうまく活用している。次年度にさらに深めるための新しいサイクルが芽吹き始めている。

（５）地域課題解決に向けた探究的な学び（くまモンプロジェクト）について

CORE ハイスクール・ネットワーク事業において、ネットワークを構成する多様な地域（熊本市・阿蘇・天草・人吉球磨）が一体となって地域課題解決に向けた探究活動（共同調査、意見交換、合同発表会等）を行うことにより、地域への貢献及び生徒の「生きる力」の育成に寄与することを目的としたプロジェクトである。各学校で実施している総合的な探究の時間などの探究的な学びについて、ネットワーク構成校同士で連携し活動に取り組んでいる。手法として、過程や成果をクラウドで共有したり、相互にアンケートを実施して研究を深めたり、イベントと一緒に参加するなど、ネットワーク構成校のさらなる連携につながっている。

また、各学校の特色や強みを活かした取組を重点的に推進する「熊本スーパーハイスクール（KSH）構想」に取り組む高校魅力化推進室と連携し、令和 6 年 12 月 21 日には「KSH 生徒研究発表会 県立高校学びの祭典」において、CORE 事業のブースを出展し、遠隔授業の取組なども含めた各学校の取組の紹介を行った。

さらに、令和 7 年 3 月 13 日には、くまモンプロジェクトの発表会を実施し、生徒同士活発な意見交換が行われた。次年度の取組に向けて参加した生徒の学びも大きく深まる貴重な機会となった。

○【小国高校のカatalogギフト製作（第一高校と球磨中央高校との連携）】

小国高校では高校生が推したい地域の魅力の商品がつまったカatalogギフトを紹介しようと、一般社団法人 KURUMIRAI の協力で高校生がつくるカatalogギフト製作に取り組んでいる。活動をとおして、販売や広報などに課題を感じた生徒たちは、認知度を上げるためのポップアップイベントとして熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業で実際に遠隔授業を行っているネットワーク構成校の球磨中央高校と第一高校に協力を依頼し、連携企画を行った。

10 月 19 日に球磨中央高校で開催される球磨中央百貨店へカatalogギフトの商品の展示販売を行った。午前中はほとんど売れない状況であったが、球磨中央高校の生徒が実際に声掛けを行っている様子や販売している様子を見ることで、自分たちに足りなかったところを学び、その反省を生かして午後からは好調な売れ行きをみせるなど、他校と連携することで、生徒にとって協働的な学びが深まることとなった。

また、花畑広場プロジェクトに取り組む第一高校の生徒とどのような取組ができるかなどオンラインでの打ち合わせを何度も行い、10月28日の第一高校主催の花畑ピクニックにて小国高校の取組についての展示を行った。

さらに、2月24日に第一高校主催のぬくぬくフェスにおいて、小国高校の生徒が開発したカタログギフトや総合的な探究の時間で関わった事業者の商品（杖立温泉水と小国杉を活用した入浴剤及びボディクリーム、小国ジャージー牛乳を活用したクッキー）を販売した。来場者にチラシ配布を積極的に行うことで、ブースに人を呼び込むことができ、商品販売につながった。小国高校の生徒が活動する様子を見た第一高校の生徒も来場者へ積極的にコミュニケーションを図ることで、花畑広場の活性化の広報につながり、両校の生徒にとって協働的な学びが深まるイベントとなった。

【小国高校と球磨中央高校の連携の様子】

OGUNI- GIFT、KIYORA- GIFTとは？

一般社団法人KURUMIRAIの協力で「高校生がつくるギフト」に取り組んでいます！



高校生が推したい地域の魅力の商品が詰まったカタログギフト券！！
売れると一部が学校の寄付金に！

昨年度の課題

③広報

- ・SNSへの投稿、熊日新聞への掲載、ローカルメディアでの放送、地域の広報誌への掲載、道の駅でのポスター展示など広報活動を行ったが、認知度が上がらなかった
- ⇒ポップアップイベントを行う必要がある

熊本県のOORE/ハイスクール・ネットワーク

小国高校が配信授業を受けている学校に協力をお願いしてみました！



そこで昨年度の反省から、、、

- ①熊本県立大学でのマーケティング特別講義、ワークショップ
- ②ポップアップイベントの実施
球磨中央百貨店での販売、第一高校主催の花畑広場プロジェクトとの連携、文化祭でのリアルカタログギフト企画
- ③実際に販売につながる営業活動
- ④生産者の思いを伝えるペーパー作成
- ⑤テレビCM撮影

特に営業チームは①～③に力を入れました。

球磨中央百貨店への参加

10月19日球磨中央高校で開催された球磨中央百貨店へギフトと商品を展示・販売させていただきました



しかし

- ・うまく呼び込みできない
- ・チラシを配っても受け取ってもらえない
- ・値段を見ただけでスルーされる
- ・他のブースに負けて人が来なくなるなど

まさかの0個

午前中はほとんど売れなかった 😞



午前中の反省から、、、

- ・道行く人に、小国町を知っていますか？というところから声をかけてみる
- ・小国町の観光パンフレットを配る
- ・手の届きやすい400円台の入浴剤を全面に出し、女性を中心にすすめていく
- ・ギフトのいい活用方法などを言って宣伝
- ・放送などで流す

など
すると！

球磨中央高校の生徒と小国高校の生徒の違い

球磨：商品のいいところを述べながら声掛け
小国：チラシを配る人で精一杯
球磨：午前中から買いたい！と思わせる放送
小国：午後から放送を活用
球磨：事前に地域にチラシ配布・ホームページなどに掲載
小国：まだ地域の中でも知らない人が大半

など




球磨中央高校でのアンケート調査結果

- ・小国高校の生徒さんのアピール力は流石だと感じました。
 - ・生徒たちの接客がとても魅力的で、印象に残りました。
- また、お客さんに買ってもらえるよう声掛けをしていたりしていたので、とても良かったです。

(球磨中央高校の生徒から)

- ・自分たちで仕入れて販売するという取組は、社会を一足先に知る上でいい取組みだと思います。私も小国高校の方々と同じ高校生なので、自分の高校の情報を発信していこうと思います。

【小国高校と第一高校の連携の様子】

10月15日&21日
花畑広場プロジェクトに取り組み第一高校の生徒とオンライン打ち合わせ

- ・どんなコラボの仕方ができるか
- ・どんな風にセットしてほしいか
- ・どういうコンセプトでやっているのか
- ・どのような取り組みなのか

など



花畑広場

10月28日
花畑広場（サクラマチクマモト前）で第一高校主催の花畑ピクニックにてOGUNI・GOプロジェクトの展示を行いました！






花畑広場での通行人の反応

- ・「小国出身だけど、いつのまにか地元がこんなこと（OGUNI - GOプロジェクト）をしていて驚きました！応援しています！」
- ・「これは、高校生がやっているんですか！？小国の高校生たちは、凄いことをやっていますね！」
- ・（熊本市内の高校生から）「小国ってどこだっけ？阿蘇の奥？」
- ・（熊本市内の高校生から）「総合的な探究の授業でこんな商品開発できるなんて、羨ましいです！めっちゃ面白そう！」
- ・（熊本市内の高校生から）「OGUNI - GIFTに掲載されているバターサンドが欲しいです！今度買います！」

○【牛深高校の地域との連携による探究活動の充実】

牛深高校では地域と連携し、様々な探究的な学びを実践している。また、単年度で終わるのではなく、先輩から後輩へ探究的な学びが引き継がれることで、よりブラッシュアップされた探究的な学びへと発展を続けている。

- ・牛深ラーメン
- ・うしぶかライトアップ大作戦
(牛深イルミネーション)
- ・観光パンフレット制作
- ・牛深アドベンチャーレース



牛深ラーメン

1. 研究の動機

先輩方がラーメンで牛深を盛り上げようと牛深ラーメンの開発、牛深ハイヤ祭りでの試食会、牛深BASEでの販売を実施されており、私たちが先輩のあとを受け継ぎラーメンを更によくしたいと思ったから

うしぶか
ライトアップ
大作戦

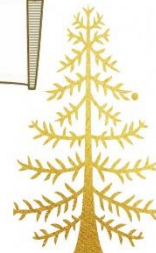


テーマ

夏と冬に牛深で開催される
ライトアップイベントを盛り上げよう！

課題

- 盛り上げるにはどうしたらよい？
- 写真映えするようなフотスポットが少ない
- フотスポットを考案しよう！





【令和6年12月21日「KSH 生徒研究発表会 県立高校学びの祭典」の様子】

各学校が日頃の探究的な学びについての発表や学校の紹介などを行った。各高校ごとのブースとは別に熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業のブースを横並びで配置することで、ネットワーク構成校の一体感を持たせることができた。



2.5. 考察

(1) 生徒アンケートをととして

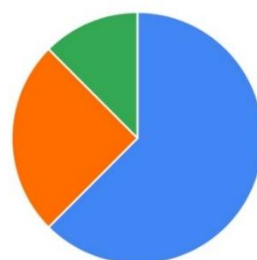
令和6年度において、新規開講科目はないが、令和5年度までの遠隔授業の内容について今年度さらに発展させることができたと考えられる。

①数学B及び数学C：第一高校（配信校）対象

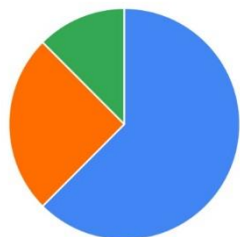
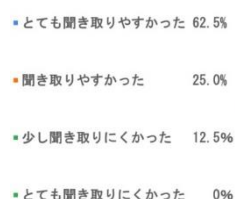
1 受講した遠隔授業（配信校側）の学習内容は理解できましたか。



2 受信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 受信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。

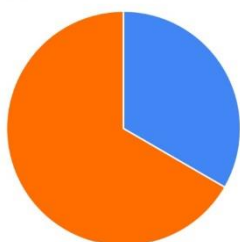


4 遠隔授業（配信校側）で改善してほしいことはありますか。

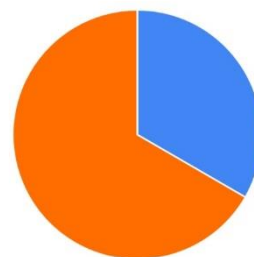


②数学B及び数学C：小国高校（受信校）対象

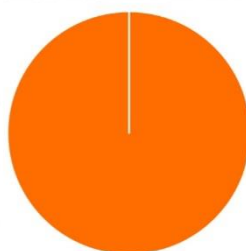
1 受講した遠隔授業（受信校側）の学習内容は理解できましたか。



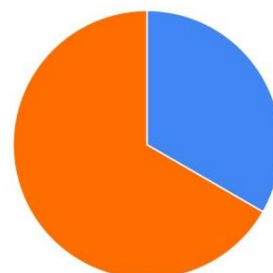
2 授業の映像や配信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 授業の音声や配信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



4 遠隔授業（受信校側）で改善してほしいことはありますか。



【分析】

1 学習内容理解

配信校、受信校ともに「とても理解できた」「理解できた」という回答で占めた。授業担当者の丁寧な対応が生徒の理解度にしっかり反映されているものである。

2 映像の見やすさ

配信側に「少し見にくかった」という回答があるが、黒板の文字が細かったり、黒板に反射したりして見えにくかったものである。

3 音声の聞き取りやすさ

配信校に「少し聞きづらかった」とあるのは、受信側の生徒が解説をする際に、集音器をマイクとして扱っていたためである。

4 授業改善

理由にあったのは、黒板を写す時間をもう少し長くしてほしいという要望であった。画面の切り替えのタイミングなどで改善が可能であると考える。

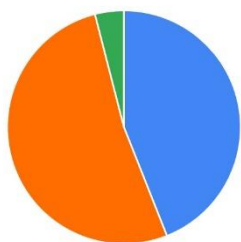
5 授業を受けた生徒の感想

数学の解法について考えを共有することにより、新たな視点を発見することで学びが深まったという意見が多かった。他校の生徒と一緒に授業を受けることで、良い刺激になったという意見も多く見られた。

③マーケティング：球磨中央高校（配信校）対象

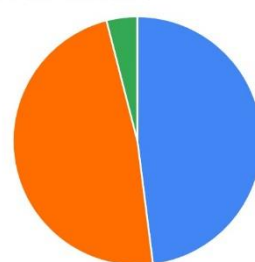
1 受講した遠隔授業（配信校側）の学習内容は理解できましたか。

■ とても理解できた	44.0%
■ 理解できた	52.0%
■ あまり理解できなかった	4.0%
■ 理解できなかった	0%



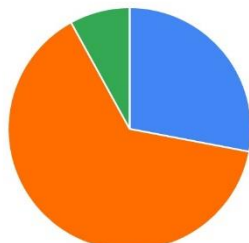
2 受信校の生徒の映像は見やすかったですか。

■ とても見やすかった	52.0%
■ 見やすかった	48.0%
■ 少し見にくかった	4.0%
■ とても見にくかった	0%



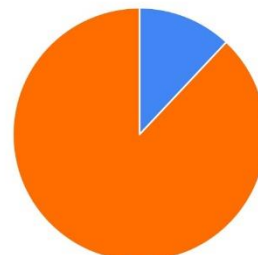
3 受信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。

■ とても聞き取りやすかった	28.0%
■ 聞き取りやすかった	64.0%
■ 少し聞き取りにくかった	8.0%
■ とても聞き取りにくかった	0%



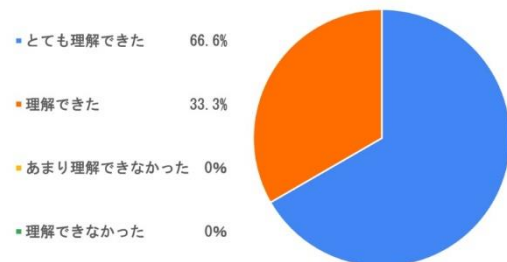
4 遠隔授業（配信校側）で改善してほしいことはありますか。

■ ある	12.0%
■ ない	88.0%

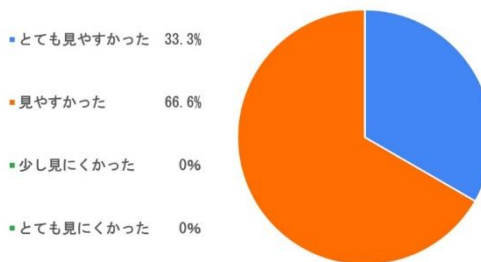


④マーケティング：小国高校（受信校）対象

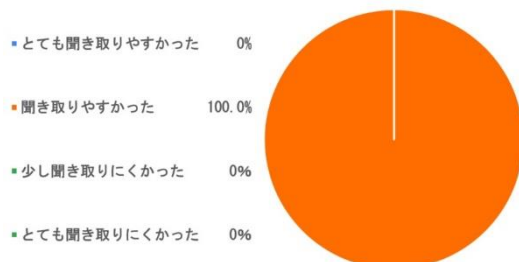
1 受講した遠隔授業（受信校側）の学習内容は理解できましたか。



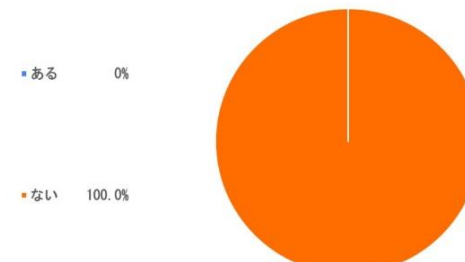
2 授業の映像や配信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 授業の音声や配信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



4 遠隔授業（受信校側）で改善してほしいことはありますか。



【分析】

1 学習内容理解

配信校で一部「あまり理解できなかった」とある一方、受信校では「とてもよく理解できた」「理解できた」の回答が占めた。受信校の小国高校には商業科目に興味関心が高い生徒が意欲的に学習に取り組むため、理解度も高いことが予想される。

2 映像の見やすさ

配信校に「少し見にくかった」という回答があるが、音声と合わせて、映像や声の届き方に時間差がある点を指摘した回答であると考えられる。

3 音声の聞き取りやすさ

機器の経年劣化も含めて今後調査が必要である。

4 授業改善

映像や声の届き方に時間差がある点の改善を求める声が挙げられている。機器の状態の確認をする必要がある。

5 授業を受けた生徒の感想

普通高校と専門高校で他校の生徒の意見が聞けるところに面白さを感じるといふ生徒の意見がとても多かった。特に考え方の視野が広がり、多様な意見を取り入れ、自分の考えの深化につながることで、自らの成長を実感できるとい

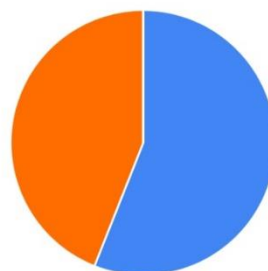
う意見も見られた。また、学年が異なる生徒同士の交流の機会は新たな刺激にもつながり、対話の重要性をより実感したという意見も見られた。

⑤マーケティング：球磨中央高校（配信校）対象

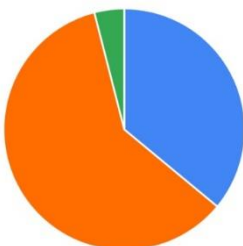
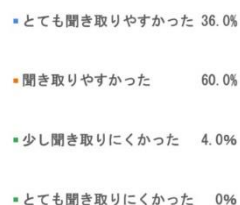
1 受講した遠隔授業（配信校側）の学習内容は理解できましたか。



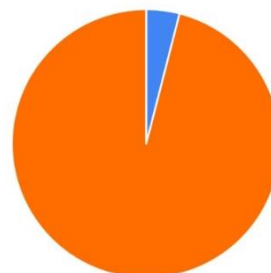
2 受信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 受信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。

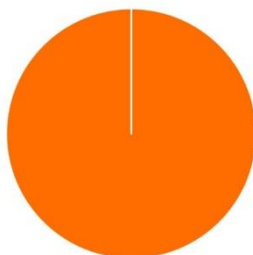


4 遠隔授業（配信校側）で改善してほしいことはありますか。

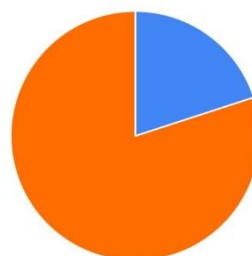
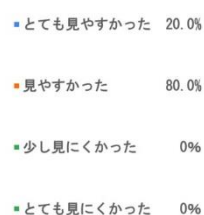


⑥マーケティング：牛深高校（受信校）対象

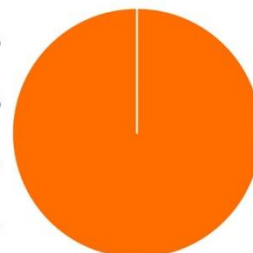
1 受講した遠隔授業（受信校側）の学習内容は理解できましたか。



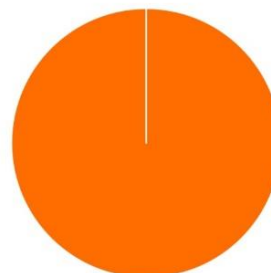
2 授業の映像や配信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 授業の音声や配信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



4 遠隔授業（受信校側）で改善してほしいことはありますか。



【分析】

1 学習内容理解

配信校・受信校ともに「とてもよく理解できた」「理解できた」の回答が占めた。授業担当者がスプレッドシートなどを効果的に活用し、分かりやすい授業を展開していることが結果に表れている。

2 映像の見やすさ

映像の見やすさについては特に問題ないと考える。

3 音声の聞き取りやすさ

配信校で一部「少し聞き取りにくかった」とある一方、受信校では「聞き取りやすかった」の回答が占めた。

4 授業改善

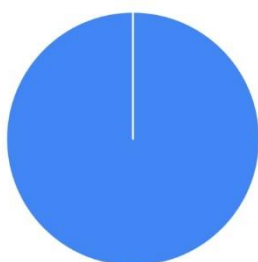
音声の聞き取りやすさの項目とも関連するが、インターネットの通信不良で音声途切れたりしたことがあった点の改善を求める声が挙げられた。

5 授業を受けた生徒の感想

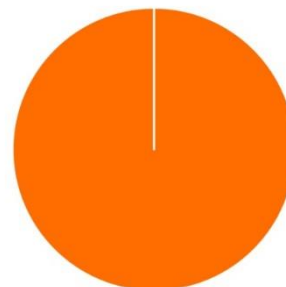
小国高校との遠隔授業の感想と同様に普通高校と専門高校で他校の生徒の意見が聞けるところに面白さを感じるという生徒の意見がとても多かった。異なる地域の実情や、各学校の特色などを知る機会にもなり、視野が広がるとともに、多面的な視点でものごとをとらえる力が身についたという意見も見られた。

⑦発展英語：小国高校（受信校）対象

1 受講した遠隔授業（受信校側）の学習内容は理解できましたか。



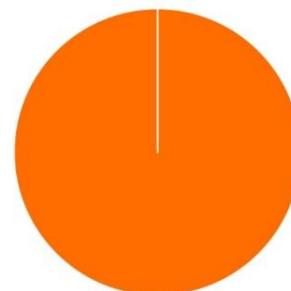
2 授業の映像や配信校の生徒の映像は見やすかったですか。



3 授業の音声や配信校の生徒の音声は聞き取りやすかったですか。



4 遠隔授業（受信校側）で改善してほしいことはありますか。



【分析】

1 学習内容理解

上級学校進学という明確な目的を持って取り組む生徒の姿と、指導教諭による質の高い学びが遠隔授業でも行われた結果であると考える。

2 映像の見やすさ

学校に配備されているクロームブックを用いて、Google Classroom を活用した遠隔授業が行われたが、特に問題はなかった。

3 音声の聞き取りやすさ

「少し聞き取りにくかった」という意見については、基本的に音声に問題はなかったが、チャイムと重なったり、電波の都合によっては音声が乱れることがあったという報告を受けている。

4 授業改善

特に授業改善に関する要望はなかった。

5 授業を受けた生徒の感想

発展的な英語に関する学習をとおして、二次試験等に対する力が身に付いたという意見や、英語の楽しさを改めて実感できたなど、非常に生徒の満足度が高い授業が展開された結果であると考える。

令和6年度は、新たに新規開講した科目はないが、これまで開講した科目をより発展させた遠隔授業が行われた。生徒アンケートからも分かるように配信校・受信校共に学習内容理解の満足度、映像の見やすさは高い評価になっている。音声の聞き取りやすさについては、機器の性能を上げる必要もあり、今後検討が必要である。授業を受けた生徒の感想からは、生徒たちが遠隔授業をとおして、学びを深めるとともに、異なる学校の生徒の交流を楽しんでいる姿が見られた。特に、お互い刺激し合うことで、進路目標に対するモチベーションを向上させたり、他地域の実情を知ることによって新たな視点の発見に気づくなど、多くの学びを生徒たちが実感したことは、生徒の生きる力の育成に大きく繋がっている。また、学力の向上だけでなく、他学年・他地域の生徒との交流をとおして、コミュニケーション力の向上や学びの深化にも結びつき、遠隔授業をとおして学力指標だけでは測れない学びが得られていることが分かる。

(2) 目標設定シートに対応した成果と課題

①成果目標・活動目標（生徒の学習成果に関する目標）

遠隔授業受講者の大学進学率の向上

	5年度（実績）	6年度	7年度	8年度
目標値		40%	45%	50%
実績値	36.6%(15/41人)	37.5%(6/16人)		
目標設定の考え方	遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を確認することにより、遠隔授業の学習効果を確認することができる。			
成果把握のための測定方法	遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を算出する。			
把握のための測定方法及び指標	遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を分析した上で、学びのPDCAサイクルの確立と学力向上に向けた取組を支援する。大学に進学した生徒の割合（単位：％）で算出する。			

(成果) 遠隔授業受講者の大学進学率については、令和6年度の実績については微増であり、目標値の40%を超えることはできなかった。小国高校の進路実績は、地方の小規模校でありながら着実に結果を残しており、令和5年度には発展英語の学習を通して、海外での学習に興味を持ち海外大学に進学した生徒もいる。

(課題) 大学進学率については、年度末に判明するため、その結果を確実に次年度からの事業に生かせるよう、年度当初の連絡協議会等でもネットワーク構成校と情報を共有して事業を進めていく必要がある。

②成果目標・活動目標②

遠隔授業に係る成果発表会（公開授業を含む）（以下、成果発表会）に参加した高校（他県管理機関等含む）の数

	5年度（実績）	6年度	7年度	8年度
目標値		20	35	50
実績値	0	15		

目標設定 の考え方	各県立高校（他県管理機関等含む）が成果発表会に参加することにより、本県で実施している遠隔事業及び通信教育への理解を深めることができ、遠隔授業の普及・促進につながる。
成果把握 のための 測定方法	参加機関数を確認する。 令和6年度参加機関：県立高校13校、高知県教育委員会、認定NPO法人カタリバ
把握のた めの測定 方法及び 指標	HPや各種研修会等をとおして、取組の最新情報について発信する。成果発表会については、より多くの高校（他県管理機関等含む）が参加できるように、ハイブリッド形式とする。

（成果）今年度初めて成果発表会（公開授業）を配信校の第一高校及び球磨中央高校で実施した。参加形態を選べるよう参集参加とオンライン参加のハイブリッド形式で計画し、より多くの高校が参加できるようにした。目標値には届かなかったが、遠隔授業の取組を普及啓発する第一歩はできたと考える。

（課題）成果発表会（公開授業）について12月と1月に実施したが、日程については配信校側と参加者の負担にならないよう、開催時期を分散させる必要がある。また、公開授業だけでなく、遠隔授業コーディネーターによる成果発表会、生徒成果発表会などについても次年度以降計画していく。

③ネットワーク構成校数及び遠隔授業の実施教科・科目の拡充について

（成果）今年度のネットワーク構成校は第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校、教育センターであり、令和3年度より変更はなかったが、令和7年度よりネットワーク構成校に福岡県との県境に位置する岱志高校が加わる。新規ネットワーク構成校の増加は前事業からの大きな進歩であり、これまでの取組で学んだことを、ぜひ岱志高校の学校間連携型の遠隔授業に生かしていきたい。

また、実施教科・科目数については、令和6年度が3教科4科目であったが、令和7年度は5教科6科目の予定である。今年度は早い段階からネットワーク構成校に対し、受信希望教科・科目調査を行った。生徒のニーズを把握し、生徒の学びたい気持ちを実現できる「教科・科目充実型」の遠隔授業につなげていきたい。

(課題) 令和８年度の配信センターの整備に向けても計画及び準備を進めているが、現在行っている学校間連携型の遠隔授業について、今後配信センターを設置することで、どのように自走していくか整理が必要である。学校間連携型の遠隔授業については、学校側の負担等課題も多いが、配信側、受信側の生徒の交流をとおして、生徒の多様な学びを実現できる貴重な機会になることも事実である。今後、配信センター設置後の学校間連携型の遠隔授業のあり方について、検討が必要である。

3. 通信教育の実施やその運営体制に関する取組

3.1. 調査計画

本県では、令和8年度の配信センター設置の検討を進めており、配信センターを中心拠点として通信教育のあり方についても協議を行っている段階である。令和8年度に配信センターの試行運用を計画しているため、通信教育についても令和8年度からの試行としていたが、遠隔授業及び通信教育の普及発展のため、県立高校の希望する全ての1、2年生の生徒を対象に、ニーズに応じた内容の集中講座を教育課程外で令和7年度から試行することにした。

通信教育の内容は、長期休暇中の集中講座を予定しており、集中講座の科目については、配信センター配置の教員数や担当教科を考慮するとともに、生徒のニーズを把握した上で検討する。アンケート調査で生徒のニーズを把握した内容を、カテゴリー別に分けることになるが、どのようなカテゴリーにするかは、配信センターの教員の数やその教員の担当教科等を含めて検討する必要がある。各集中講座受講後には、受講者に対するアンケート調査を実施して、集中講座の更なる充実に向けて、管理機関の担当者と配信教員による振り返りを行う機会を設ける。

(1) 通信教育（集中講座）実施までのスケジュールについて

- ・ 6月上旬：県立高校の1、2年生を対象に夏期休業中における集中講座の受講希望調査
- ・ 6月下旬：夏期休業中における集中講座の時間割の作成
- ・ 7月上旬：夏期休業中における集中講座の時間割を各学校に通知
- ・ 7月下旬もしくは8月上旬：集中講座実施
- ・ 8月下旬：集中講座の受講者に対するアンケート調査・分析
- ・ 10月上旬：県立高校の1、2年生を対象に冬期休業中における集中講座の受講希望調査
- ・ 10月下旬：冬期休業中における集中講座の時間割の作成
- ・ 11月上旬：冬期休業中における集中講座の時間割を各学校に通知
- ・ 12月下旬：集中講座実施
- ・ 1月中旬：集中講座の受講者に対するアンケート調査・分析
- ・ 2月～3月：次年度における集中講座の教科・科目の検討

(2) 長期休業中に実施する予定の集中講座の内容について

【夏期集中講座】

- ・実施時期：7月下旬もしくは8月上旬
- ・配信元：教育センターもしくは配信担当者が所属する学校
- ・講座内容：未定
- ・講座数：未定
- ・回数：未定
- ・講座形式：LIVE 形式及びオンデマンド形式
- ・参加資格：全ての県立高校の1、2年生の生徒
- ・受講料：無料
- ・会議システム：Google Meet

【冬期集中講座】

- ・実施時期：12月下旬
- ・配信元：教育センターもしくは配信担当者が所属する学校
- ・講座内容：未定
- ・講座数：未定
- ・回数：未定
- ・講座形式：LIVE 形式及びオンデマンド形式
- ・参加資格：全ての県立高校の1、2年生の生徒
- ・受講料：無料
- ・会議システム：Google Meet

※講座内容、講座数、回数については、生徒のニーズを把握した上で検討する。

3.2. 実施体制

通信教育の中心拠点は配信センターを予定している。運営及び通信教育に関する業務については、遠隔授業を担う配信センターの教員が行う。課業日の遠隔授業に係る業務を行うとともに、集中講座に係る業務も進めていく必要がある。

既存のネットワーク構成校とも連携を深めるため、遠隔授業に係る学校代表者と通信教育に係る代表者が連携できる体制を管理機関が構築する。

集中講座の受講者への連絡については、可能な限り Google Classroom を活用

して、配信センターの各講座担当者から周知するシステムを構築する。そうすることで、各学校の通信教育担当者の業務を削減することができる。

○通信教育（集中講座）に係る配信センターに所属する教員の業務について

- ・生徒の受講希望調査
- ・時間割作成
- ・時間割等の学校への周知
- ・集中講座に係る諸連絡
- ・集中講座の配信
- ・集中講座後の受講者に対するアンケート調査・分析等

3.3. 取組概要

本県では、令和８年度の配信センター設置後、配信センター所属の教員による長期休業中の集中講座を教育課程外で実施することを計画しており、令和６年度は令和８年度に向けての通信教育の実施についての整理を行った。

講座の受講については、現在遠隔授業を行っているネットワーク構成校の生徒に募集を行うことを当初計画していたが、遠隔授業及び通信教育の普及発展のため、県立高校の希望する全ての１、２年生の生徒を対象に、ニーズに応じた内容の集中講座を教育課程外で令和７年度から試行することにした。受講希望調査については令和７年度の６月に実施を予定している。各校の日程等で、講座のすべての時間に参加できない場合も、受講は可能とする等、柔軟な対応を行う。講座は同時双方向のやり取りを可能とする LIVE での講座及びオンデマンド形式の講座を検討している。オンデマンド形式での通信教育については、動画の時間や、動画の内容と関連させた課題等について、様々な工夫をしながら、最も効果的な方法を模索する。オンデマンド形式では、同時双方向のやり取りではないため、質問等ができない。そのため、メールを活用した質問等、質問をどのような形で実施するのかについても検討していく必要がある。

通信教育の実施における工夫として、遠隔授業で培ったスキルを活かすことが考えられるが、受講者の習熟度等にばらつきがあるため、教育課程内の遠隔授業と比べ、理解度の確認を丁寧に行う必要がある。

3.3.1 通信教育実施表

今年度本県では通信教育の実施については行うことはできなかった。

3.4. 取組内容

通信教育に関しては、令和8年度の配信センター設置と並行して計画を進めている。遠隔授業及び通信教育の普及発展のため、令和7年度に県立高校の希望する全ての1、2年生の生徒を対象に、ニーズに応じた内容の集中講座を教育課程外で試行するための整理を今年度実施した。

通信教育における集中講座については、生徒の一人一台端末を使用するため、自宅で受講することが可能になる。自宅で受講することにより、学校への移動時間等を気にする必要がなく、また移動にかかる時間を他の学習時間に充てることが可能になる。

オンデマンド形式での配信については、配信期間は限定するものの、受講時間を限定しない形で実施し、生徒自身のペースで受講することができるような体制を整える。以上のことより、学習効果の向上が期待される。

効果把握を可能とする仕組みの構築に向けた検証については、各講座後に受講者に対するアンケート調査を実施することで、効果把握に努めていきたい。生徒から提出された課題やポートフォリオ等を確認することもできる。令和7年度からの通信教育の試行に向けて進めていきたい。

3.5. 考察

本県にとって、遠隔授業や通信教育を定着させるためには、配信センターの設置が急務である。中山間地域の県立高校の充足率の低下が進む中、遠隔授業や通信教育によって、各地域で多様な教科・科目が学べることは、学校の魅力化にもつながり、ひいては地域の活性化にもつながる。さらに、ネットワーク構成校以外の生徒にも通信教育をとおして、遠隔授業の学びを提供し、生徒の学力向上を図ることができる考える。

(成果)

令和8年度の配信センター試行運用開始に向けて、本年度、先進県の配信センター視察をとおした情報収集を行った。各県の状況に応じた配信センターの運用を視察する中で、常にPDCAサイクルを意識し、運用業務を行いながら改善に向けて準備を進めるなど、配信センターの更なる充実を推進する取組が強く印象に残っている。本県での配信センター設置に向けた検討を行うとともに、令和7年度からの教育課程外での集中講座実施に向けた計画・準備を進める一助となった。

(課題)

今年度は情報収集や計画準備を行う段階までしかできなかったため、具体的な通信教育の実施を行うことができなかった。令和7年度の教育課程外での集中講座実施をととして、通信教育についての取組を進めていきたい。

令和8年度には配信センター試行・運用を行う予定であり、配信センターからの集中講座実施を計画している。本県においても、配信センターを運用しながら、常に改善を図っていけるよう、運営指導委員会や連絡協議会等、令和3年度から国の指定事業において整えた体制を更に充実させながら、配信センター運営に関わる人たちと密に連携をとれる体制を構築する。

4. まとめ

■遠隔授業

「遠隔授業に係る主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」

令和6年度公立高等学校入学者選抜において定員を満たさない科が一つでもある高校は39校であった。そのうち熊本市以外の学校が37校あり、熊本市一極集中の傾向は変わっておらず、地方の学校にいながらも進路実現が可能であるという学校の魅力化はまだ道半ばである。遠隔授業における質の高い教育の実践により、遠隔授業を受講した生徒の満足度はとても高い状況であり、遠隔授業の高い教育的効果につながっているといえる。高い満足度のままで終わりにせず、学力向上につながり、実際に大学進学率の向上につながったかどうかについては、令和6年度末の結果をもとに、次年度検証を行っていく。

令和3年度から3年間で本県が取り組んできた、様々な授業者による、様々な授業をとおして、学校の魅力化の一つとなり得る遠隔授業の可能性について整理するとともに、令和6年度からの熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業において、学校間連携のさらなる拡充に向けて進めることができた。

また、授業者と立ち合い者が生徒に身につけてほしい資質・能力や生徒の希望進路等の共通理解のもと、連携しながら取り組んで行くことで生徒の学力向上や学びの深化に繋がり、対面授業と同等またはそれ以上の効果をもたらすことが明らかになった。

さらに、前事業までの「遠隔授業を担当できる次の人材の育成についても、協議会や研修会の充実を図ることができず、未だ特定の教員の実施にとどまっており、遠隔授業に携わるための体制整備が確立されたとは言い難い」という反省を生かし、今年度初めて遠隔授業の普及・促進を目的に成果発表会（公開授業）を実施した。参集参加、オンライン参加と参加形態は様々だったが、遠隔授業を実際に見てもらうことで遠隔授業の可能性を実感してもらえる貴重な機会となった。

今後、令和8年度の配信センターの試行・運用に向けて準備を行っていくが、学校間連携の良さも残しつつ、遠隔授業の可能性を深めていきたいと考える。配信センター設置後の科目の開設・拡充については、中山間地域の複数の学校に調査を行い、需要を確認した上で配信科目の決定を行う予定である。学校間連携における複雑な調整等も配信センター設置後には改善できると考えており、現在よりも柔軟に科目の設定ができるため、県内各地の生徒の学習ニーズに応える

ことができると考える。また、事業終了後に向けて、配信センターを拠点とした地域で多様な教科・科目を学ぶ遠隔授業の体制構築を進めていく。

■通信教育

「県内各地の生徒の多様な学習ニーズに応えることができる通信教育の体制構築に向けて」

通信教育に関しては、令和8年度の配信センター設置と並行して計画を進めており、今年度は令和9年度からの自走化に向けてのロードマップを作成するとともに、通信教育についての整理を行った。令和7年度に県立高校の希望する全ての1、2年生の生徒を対象にし、ニーズに応じた内容の集中講座を教育課程外で試行するため、現在準備を進めている。通信教育を行うことで、ネットワーク構成校以外の生徒にも遠隔授業の学びを提供できるため、県内各地の生徒のニーズに応えることができる通信教育の体制づくりを構築していく。

今年度の取組をとおして、遠隔授業を真に必要としている地域では、遠隔授業が学校の魅力の一つとして地域住民にも認識されていることが分かった。生徒募集に苦慮している地域の小規模校は、熊本市や近隣の大規模校へ地元の生徒が流出するという同じ課題を抱えている。そのような同じ課題を抱えた学校間で日課や教育課程の共通化を図れば、遠隔授業に本来の意味を見出すことができ、また、地域を超えた地域課題解決に向けた探究的な学びも、深いものになっていくと思われる。

ただ、学校側の負担も大きいというところが課題であり、学校間連携の遠隔授業から取組を一步進めるためにも配信センターの設置は急務である。これまでの取組で得た知見を生かし、また、課題として残った部分については、引き続き研究しながら、小規模校の魅力化につながるよう、推進していく次第である。

令和 6 年度指定
「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業
（学びの機会の充実ネットワークの構築）」
（熊本版 C O R E ハイスクール・ネットワーク事業）
研究開発実施報告書（1 年次）

令和 7 年 3 月発行

住所

発行者

 熊本県教育庁県立学校教育局高校教育課
〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺六丁目 18 番 1 号
電話 096-333-2685 FAX 096-384-1563

住所

印刷所

 株式会社アクセス
〒862-0971 熊本県熊本市中央区大江 4 丁目 16 番 1 号
電話 096-372-1010 FAX 096-373-1313